

団地の雨水対策が住民の防災意識に与える影響

—コンフォール松原を事例として—

氏名 村上里奈

災害対策におけるハード面の強化が、住民の防災意識強化へ影響を与えるのかという問いから、建替事業により災害に強いまちに生まれ変わったコンフォール松原を対象に調査を行った。コンフォール松原では雨水貯留施設が完成し、ハード面の水災害対策が進んでいる。本研究は、この貯水槽を知る人、知らない人の防災意識や行動の違いから、コンフォール松原の地域課題を明らかにすることを目的とする。

コンフォール松原の住民を対象としてアンケート調査を行った。調査依頼 955 件のうち、51 件の回答を得た。属性や貯水槽の認知、防災行動等に関する回答を集計し、年代別や貯水槽の認知別に防災行動の比較を行った。

結果として、地域全体の防災意識は高くある反面、貯水槽の認知度の低さが顕著であった。また、貯水槽の認知も、リスクの理解度の高さも、年代別で格差が表れていた。防災行動に関しては、貯水槽を知る人と知らない人で違いがあり、住民の課題だけでなく、地域全体としての課題を発見することができた。

これらから、コンフォール松原の地域課題は3点挙げられた。1つに、防災意識があっても実際に行動してみるのではなく、調べた知識を持っている段階で止まっている住民が多くいることである。2つ目に、高齢者の方が水害リスクの理解度、貯水槽の認知度共に高かったことから、防災意識の年代格差があることである。3つ目に、地域の広報不足である。貯水槽を知る人と知らない人の防災行動の違いに、地域情報を積極的に頼りにしているかどうかに関連していた。この3要素を改善していくことで、まちだけでなく人も災害に強い地域へと繋がると考察した。